



# 「外」との対話で創られる文学



作家・詩人・翻訳家

Izawa Naoki

## 池澤 夏樹

優れた文学作品に触れることは、想像力を養い、感性を培う。今、日本文学は、翻訳を通じ、国境を超えて読まれる「世界文学」へと変わりつつある。日本語の書き手は、何を思い、どのように創作をしているのだろうか。詩や小説のみならず翻訳も手がけ、「世界文学全集」「日本文学全集」を個人編集するなどの試みを続ける作家・池澤夏樹さんに、海外の滞在経験も含めお話を伺った。

取材・執筆／奥山晶子 撮影／名取和久

### 海外を渡り歩いても 立ち位置は あくまで「日本」

池澤夏樹氏は、北海道に生まれ育ち、30代でギリシャに3年、40〜50代で沖繩に10年、60代でフランスに5年と国内外でさまざまな場所に滞在。広く世界を見聞しながら、詩や小説、翻訳、評論など創作活動を行ってきたが、そ

の海外遍歴は、27歳でミクロネシアの小さな島へ行ったときから始まったという。昔から日本とは「折り合いが悪い」と感じ、高度経済成長期のなかで活気あふれる日本に息苦しさを感じていた池澤氏は、その島ののんびりした

暮らしに魅了された。

「それからは、別の土地の言葉や食べるもの、ものの考え方を味わうのが面白くて仕方なくなりました。旅人というのは、ちよつとずるいんですよ。選挙権もなければ税金も払わず、その社会のいいところだけをつまみ食いできるわけでしょう。生き方として楽なんです」

ただ、インドや太平洋の島々を旅するうちに旅行者の視点からは見えない

ものがたくさんあることに気づく。最低でも1年は滞在して、一巡する季節を体験したほうがいい。そう考えて選んだのがギリシャだった。すでに翻訳家として活動していた氏にとっては、ギリシャにまつわる本を翻訳し終えたというタイミングも居住を決める大事な要素になったという。それにしても、気になるのは滞在先の選び方だ。行く先は辺境と呼ばれるところばかり。沖繩や北海道と、日本で住むのもまた端

のほうだ。

「『外<sup>はず</sup>したい』という意識はあります。真ん中のことはみんなやっているから、だいたいわかる。自分の目で見なければわからないところというのは、端のほうなのです」

自身の旅について「一生を棒に振る道楽」と笑いながらも「僕の場合はいつも遠足とその後作文」と言う氏は、経験をどのように作品へと昇華させているのだろうか。沖繩滞在の経験から語る。

「現地にいた頃から沖繩に関する長編小説を書きたいと考えていました。しかしウチナンチュの独特なものの考え方を表現することは、沖繩出身ではない自分には到底できない。結局、書くことができたのは沖繩を離れてからで、それが2009年に出した『カナナ』（新潮社）です。でもやはりヒロインはフィリピーナ・アメリカンで、他の登場人物も純粋な沖繩人から少しずつ外しています」

沖繩には10年住んだが、それでやっと「沖繩に移り住んだ人」という意味の「シマナイチャー」と呼ばれるようになった。「それはとても居心地のいいものです」と池澤氏。本土人と沖繩人のボーダーラインに立つことによつて、見えてくるものがあるという。

「沖繩にいた頃は、自分の立ち位置を『勝手な特派員』と定め、基地の現状などを週刊誌で発信していました。し

かしそれは沖繩の人たちがかわいそうだからという意味ではない。隅のほうに基地を集めて知らん顔をしているというのが、自国のありようとしてみっともないでしょうと言いたいのです。それは報告先として常に日本のことを

### 作品が生まれ変わる 翻訳は極めて 創作的な営み

2007年から刊行された「世界文学全集」（河出書房新社）は、書評家の顔も持つ池澤氏の個人編集であり、第二次世界大戦後から9・11までに出版された国内外の名作に狙いが定められている。日本と「外」との関わりを考えたとき、「翻訳」は重要なキーワードだ。池澤氏にとって、翻訳とはどのようなものなのだろうか。

「大事なのは、原文が読めないから、仕方なく翻訳をするという偏見を捨てること。日本では明治以来、西洋の文物を輸入し、研究者がそれを読み解くなかで『ついでに』翻訳してきたという経緯があります。しかし、文学作品は翻訳で生まれ直します。違う言語の中に入っていくことで、再創造される。翻訳は本来能動的なものなのです。翻訳で欠落するものもあるが、もともと作品に潜んでいる力が顕わになること。意義のほう大きい」

「世界文学全集」に続けて氏が編集し

た「日本文学全集」には『日本語のために』という巻があり、「生きるべきか、死ぬべきか」で有名な「ハムレット」第三幕第一場の日本語訳が10種類にわたり収められている。

「イギリス人はあれを原語で読まなければならぬのだから大変です。翻訳なら、現代に合わせた訳がいくらでもできます。翻訳はじゅうぶん創作的な営みなのです。いわば再創造といつてもいいでしょう。だから、僕のなかでは翻訳者の地位がとても高い。特に最近は上手な仕事をする翻訳者が増えました。それに加え、いわゆる先進国ではない国から作家がたくさん生まれてきて世界文学が活性化しているため、翻訳文学はマルチリンガルとでもいってべき状況にさしかかっています。だからこそ全集が作れたのです」

南アフリカ出身のクッツェーやベトナムのバオ・ニン、チェコ生まれのミラン・クンデラなど、確かに作家陣は

池澤氏が個人編集した「世界文学全集」は、第二次世界大戦後から9・11までの作品から選出。文学をとおして今の世界が見えてくる。



「世界文学全集」全30巻

河出書房新社、2007〜11年刊行

旧植民地、旧共産圏からの出身者が多く、「世界文学」そのものの地平をひらいた全集だ。全30巻を並べれば、私たちが世界を相手に対話したいと考えたとき、こんなにも多くの文化があると思ひ知らされることになる。

では、池澤氏自身の翻訳方針は？と聞くと、「なるべく言葉を増やさず書きたい」。池澤氏が翻訳した『星の子さま』は数ある日本語訳のなかでおそらく一番短いという。原作が含蓄あふれる短い言葉で構成されているからだ。原作を読むときのスピード感を損ないたくないという池澤氏の意思があらわれている。その方針は、「日本文学全集」で『古事記』を現代語訳したときにも変えなかった。

『古事記』は展開が速くて、出会ったとたんに殺し合うか愛し合うか、奪って逃げるか、逡巡の余地がない。昔の言葉に説明を補うと読むスピードが

落ちるので、下に脚注を入れました。気になるなら注を読み、気にならなければ『古事記』特有のスピード感を楽しんでほしい。古文ではなく、文学として読んでほしいのです」

古典は、使っている言葉も背景となる社会のありようも違う「昔の日本」で書かれたものだ。その意味では、現代語訳も、いわば翻訳。「日本文学全集」では、錚々たる現代作家が古典の現代語訳に挑んでいる。町田康氏が訳する『宇治拾遺物語』はリズム感あふれる町田節が炸裂し、高橋源一郎氏訳の『方丈記』は小見出しがすべて英語だ。1855年に発生した文治地震についての章タイトルは「アルマゲドン」。3・11を彷彿させる内容で、読む者は鎌倉時代から一瞬にして現代へと引き戻される。まさに私たちの時代の現代語訳だからこそ味わえる躍動感がそこにある。

## 日本の特性は雑種文化

『世界文学全集』に1巻だけ日本の作品を入れることになったとき、池澤氏を選んだのが、石牟礼道子氏による水俣文学『苦海浄土』だ。戦後日本で生まれた公害の惨状が、ときおり挟まれる熊本弁によってリアルに示される。しかし残酷な表現が、かつての海の豊

饒さや生活の幸せをかえって引き立たせているともいえるのだ。『苦海浄土』に挟まれた『月報』には、池澤氏がこの作品に寄せたコメントがある。

「これはかつて水俣にあった幸福感の物語でもあるのだ。この点でこの作品は凡百の公害がらみのノンフィ

米の思想を取り込み、参考にするのみならず血肉化し、独自の「日本文化」を作り上げてきた。この雑種性が、西

洋の植民地でもなく地理的に遠い場所で驚異的な速さで近代化を遂げた要因のひとつであると加藤は説く。

## 「外」との対話のために 今求められる 精神性とは

「日本人の雑種性を考えれば、取り入れることにかけては優れていると思っています。でも、アウトプットがなかなかできないのが問題」と池澤氏。

「アウトプットにかけては、とにかくいいものを作るしかない。文学でいえば世界に通用するのが村上春樹だけという現況を変えて、もっと厚みを出す必要があるでしょう。一目見ればすぐ理解できるモノづくりをしている画家

や写真家を、うらやましいと思うこと

もあります。文学は必ず翻訳というステップがあり、訳者や出版社の意思がなければ世界に出ていきません。そこが難しいところですね」

インプットはじゅうぶんとする池澤氏だが、ともすればそのまま内向きに陥ってしまいがちな日本が、「外」との対話を充実させるためにはどうしていくべきだろうか。

「世界文学全集」唯一の日本の作品『苦海浄土』は、熊本出身の石牟礼道子氏による水俣文学。



池澤氏による『古事記』現代語訳。物語の展開の速さに合わせスピード感を重視した「翻訳」を心がけた。

クシヨンの類を圧倒して、人間の深みに届くルポルターージュ文学になっている。(中略) まずもってこれは観察と、共感と、思索と、表現のすべて天才による傑作である。読むたびにどうしてこんなものが書き得たのかと呆然とするような作品である」

せんね。日本では、和歌などはすべてが恋愛の話ですし、そういう意味ではピースフルな部分が大いと感じます。もうひとつの特徴は判官びいきであること。『平家物語』に代表されますが、負けたほうにばかり同情をするでしょう」

「石牟礼さんは戦後文学の巨匠10人の1人に数えられる作家です。冷遇されていた彼女の手を引いて、日の当たる場所へ連れ出したと思っています」と池澤氏は語る。

ただ、それも応仁の乱のあたりまで。女系家族の流れが途絶え女流作家がいなくなり、女性の登場人物が少なくなつたことで、日本文学は雰囲気ガラツと変える。それからは樋口一葉の登場まで女流作家が出ていない。日本人のアイデンティティについて考えたときには、どのあたりから掘り起こすかが問題だ。「たいていの人が考えている復古主義って、実はちよつと前に戻るだけなんです」と池澤氏。

「昔から恋愛が好きだなと、改めて思いました。たとえば中国文学では、古い時代に恋愛ものはありません。儒教の建前では、結婚は親が決めるもので、処女や人妻に手を出してはいけませんから。すると源氏物語が成立しま

せんね。日本では、和歌などはすべてが恋愛の話ですし、そういう意味ではピースフルな部分が大いと感じます。もうひとつの特徴は判官びいきであること。『平家物語』に代表されますが、負けたほうにばかり同情をするでしょう」

「昔の日本人は、生魚をご飯に載せたものなんて外国人が食べるわけがないと思っていたでしょう」と、池澤氏はいたずらっぽく笑う。

た感覚につながっているかもしれない。面白い言語、面白い人たち、居心地の良い空間。池澤氏が好感を持ったのは観光地としてお膳立てされたものではなく、そこにある人ともものだった。それは文学にもつながっているだろう。

「寿司は文化庁の後押しなどなくてもブームになりました。『ここにこういうものがあつて、僕はこれを楽しんでいる。よその国の人も、一緒に見て、楽しまない?』こんな積極性が、これからの日本には必要なのではないかと思ひます。『文楽って面白いじゃん、こんなに凝った人形芝居、ほかにある?』と、まずは勧めてみる。あとは向こうの判断です。面白い、居心地がいいと思ってくれたなら、研究者も留学生も自然に集まります」

その確信は、池澤氏が最初に訪れたミクロネシアの小さな島でじかに覚え

「よその国の人も一緒に見て、楽しまない?」こんな積極性が、これからの日本には必要だと思います。



Ikazawa Natsuki

1945年北海道帯広生まれ。作家、詩人、翻訳家。88年『ステイルライフ』で芥川賞受賞。おもな小説に『マシナスギリの失脚』（谷崎潤一郎賞）、「花を運ぶ妹」（毎日出版文化賞）、「カテナ」エッセイに「終わりと始まり」などがある。2007年より個人編集による『世界文学全集』全30巻を刊行（11年完結）し、14年より『日本文学全集』を手がける。